9 おわりに

1. 教員から

■ 荒木　智　特任准教授

2004年に熊本大学を卒業後、主に循環器内科を専門とし診療を行ってまいりました。2022年4月に球磨郡公立多良木病院に赴任し常勤医師がいなかった循環器内科の立ち上げに携わったのち、2022年10月より地域医療・総合診療実践学寄附講座の特任准教授を拝命し、地域医療支援センターの副センター長も兼任させていただいております。

球磨郡公立多良木病院では人生で初めてへき地診療所での診療にも携わり、高齢化率が全国平均の20年先を行く地域での医療ニーズや全人的医療の必要について改めて学ぶことができました。また新型コロナウイルス感染症の猛威も落ち着きつつある状況ですが、地域の基幹病院が受ける負担と限られた医療資源の有効活用の重要性について身をもって体感することができました。

地域医療・総合診療実践学寄附講座に赴任し半年が経過しましたが、地域を支える総合診療医の育成、修学資金貸与制度の運営・実施、地域医療機関への診療支援等の業務遂行について、理解し実践するスタートラインにやっと立てた状況です。

医師となり19年が経過しますが、総合診療医としての新たな学びができる幸せをかみしめつつ、来年度は医師修学資金貸与制度のキャリア形成支援等の業務に取り組んで参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 佐土原 道人　特任助教

診療支援先は、今年度から小国公立病院と阿蘇医療センターでお世話になっています。様々な病院から実習、研修に来ている学生や研修医からよい刺激を受けております。阿蘇へはミルクロードを経由していた頃と比べ、57号線、北側復旧ルートが開通し、時間的にも距離的にもアクセスがかなり良くなりました。震災からの復興を感じます。

今年度は、総合診療の専攻医の修了者が１名、来年度は２名の専攻医の先生方が、我々の総合診療プログラムに加わり、各連携施設で専門研修をお願いすることになりますので、よろしくご指導をお願いします。

競争的獲得資金は、兵庫医科大学の臨床疫学からのお声かけでAMEDの研究開発事業の研究協力者としてお手伝いさせていただくことになりました。学術活動では、米国内科学会日本支部のメンバーとは、医師のバーンアウトの調査を継続、来年度にバーンアウトのテキストも出版される予定です。コロナ禍で激減した授業や臨床研修指導医講習会や看護師特定行為指導者講習会など対面での実施も復活しつつあります。学会は、来年度米国総合診療医学会で演題発表の予定です。秋のシドニーでの世界家庭医機構にも演題提出しました。こういった活動もウィズ／ポストコロナ時代へと移っていくことが期待できます。今後ともよろしくお願いいたします。

■ 後藤 理英子　特任助教

2016年度から約8年間、熊本県女性医師キャリア支援センターの活動を支えてくださったすべての方に深く感謝いたします。この8年で様々な医療機関にご協力いただき、ご理解いただき、女性医師が働き続けることができる環境が整ってまいりました。また、少しずつではありますが、男性医師が育児休業を取得し、家庭参画することができるようになってきました。多様性に富む医師が、多様性に富む患者様に寄り添い、よりよい医療を提供できる、そんな医療環境を整えていけたらと思って活動を続けてまいりました。

今後の課題点としては、当直業務に復帰してくださる医師をどう支援し増やすかという点、そして、医療の世界で女性の管理職を増やすという点が挙げられます。同性のロールモデルから学び得るものは大きいことが知られていますが、残念ながら若手の女性医師や女子学生が同性のロールモデルに出会う機会は現在のところ男性に比べて多いとは言えない状況です。

今後ともこの活動に対し、深い理解とご支援をいただきますよう、お願い申し上げます。

■ 髙柳 宏史　特任助教

今年度一番大きな仕事は、日本プライマリ・ケア連合学会第17回九州支部総会・学術大会（熊本大会）で実行委員を担ったことでしょうか。2021年の段階から委員会は立ち上げていましたが、コロナ禍の中でどのように学会を開催するのか世の中の動向をモニターしながらの判断でした。様々な課題もありましたがハイブリットで無事に開催でき、盛会に終わったので本当に安堵しました。

今年も教育医長として務めさせていただきました。2022年の総合診療学の講義からは、家庭医療学に関する講義を2コマ設けました。これも私の中では大きなことでした。まだまだ新しい枠組みでの講義でしたので、これからさらに刷新し、本当に学びのある講義にブラッシュアップしていきたいと思います。

また地域枠の学生の卒前の取り組みとして、毎月開催している「地域医療ゼミ」も今年はいろんな企画が盛りだくさんでした。4月のオリエンテーションから始まり、5月の熊大医学生の企画、6月には「ささえあい医療人権センター COML」理事長の山口育子さんにご講演をいただきました。12月には、熊本出身の自治医科大学生による自治医企画をしました。これらの企画を学生と話し合いながら進めていくのも私にとってはかけがえのない経験です。

専攻医教育にも関わりました。大学の総合診療専門研修プログラムに在籍している専攻医の教育・指導としては、年に4−5回開催する「レジデントデイ」を企画しました。

診療としては大学の救急外来を２コマ、総合診療の外来を１コマ、診療支援としては天草市立御所浦診療所と今年度から上天草市立上天草総合病院でそれぞれ外来やら救急外来やらを２コマずつ担当していました。御所浦も上天草総合病院も往復で４時間移動にとられるため（御所浦は船での移動を含みます）、毎週日帰りでの支援は体にこたえます。

学会活動では、日本プライマリ・ケア連合学会の診療データベース委員会に所属しており、WONCA Working PartyであるThe WONCA International Classification Committee（WICC）に参画しました。

また新年度はどのような活動をするかわかりませんが、引き続きよろしくお願い致します。

■ 北村 泰斗　特任助教

令和4年度は、熊大総診が、ホームページやプロモーション動画の作製・配信することによって、全国の学生や初期研修医の皆さんが総合診療科っていいな、熊大総診に入りたいなと思ってもらえることをプライマリアウトカムとしてやってまいりました。動画は完成し、ホームページについては現在、鋭意作製中です。来年、これらをみて来たよって言ってくれる研修医の先生がいたらいいなと願っています。これらの活動を通して、個人的にも総合診療科について今まで以上に興味と関心をもった1年となり、改めて総合診療医っていいなと思っています。自分のこれまでの総合診療科としての活動（地域医療・診療・研究・教育）を客観的に振り返る機会にもなり、現時点での個人としての興味や関心がどのあたりにあるのか少し整理できたように思います。研究にも活かしていければと考えています。

ひきつづき、総合診療、地域医療を自分でも楽しみつつ、若い皆さんにも面白みが伝わるようコミットしたいと思います。今後ともご支援ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

■ 中村 孝典　特任助教（県北教育拠点／くまもと県北病院　総合診療科）

令和４年度は、熊本大学病院地域医療・総合診療実践学寄附講座の特任助教としてくまもと県北病院教育拠点に赴任し、臨床業務および卒前卒後教育を行いました。また社会人大学院生として研究活動も開始しました。

自身の臨床業務だけでなく、学生、初期研修医、後期研修医の教育業務についても今まで以上に時間を割くことで新たな発見もあり、自分としても新たな発見がありました。後期研修医に対する教育では、ワークライフバランスを考えるいい機会となりました。

プライベートなことでいえば７月に第３子が誕生して、それぞれ２学年違いで３人の子供をもつことになりました。出産だけでなく、育児に際して急な休みをとることが増えたため、その都度まわりのスタッフにはかなり助けていただきました。

研究活動については、なかなか研究テーマが決まらずに取り掛かりまで時間がかかってしまい思うように進まず次年度への課題となりました。

子供も増え、仕事や研究活動も行うとなると公私ともに時間の使い方が今後のテーマになってくると

思います。臨床のレベルを落とさないという大前提のうえで、学生、初期研修医、後期研修医のモチベーションを上げ続ける指導を目標に次年度も頑張りたいと思います。

■ 鶴田 真三　特任助教（河浦教育拠点／天草市立河浦病院　総合診療科）

河浦病院に赴任して２年目となりました。コロナ禍のため診療の上で特に大変な時期があったり、院外活動の制限などで地域活動や教育活動がやりにくかったりも多々ありましたが、できることを行いながら無事に過ごして来れました。レジデントも一名が通年で在籍し、学習者のペースに合ったオーダーメイドの教育を行えていると思います。

個人的には、若いころから興味があったHANDSに推薦いただき、九州版のK-HANDSに参加し、久しぶりにどっぷりと学習者として学びの時間を作るいい機会になりました。これも今後の教育や組織運営など様々な活動に生かしていきたいと思います。

学生実習については、へき地における生の地域医療を実感してもらい、やりがいを感じてもらえるように考えてプログラムを作っています。次年度からはさらに地域で医療を行うことの楽しさ、充実感を感じられるよう、他施設と連携して院外活動を増やして取り組んでいこうと考えています。

後期研修についても、レジデントの入れ替えなどもあるため、それぞれのニーズや将来像にあわせて組んでいく予定です。院内での診療だけでなく、地域の多職種や住民との対話や勉強会、院内活動や地域活動の企画の計画、乳幼児健診や学校医活動なども行えるよう計画しています。
次年度もよろしくお願いいたします。

■ 田宮 貞弘　県北教育拠点指導医（くまもと県北病院　院長／総合診療科）

令和4年度も目まぐるしく過ぎていきました。病院の通常機能を最低限維持するために、全てを費やしたイメージがあります。

現在の社会やビジネス環境をVolatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguityの頭文字をとってVUCAと呼ぶそうですが、令和4年の私の置かれた環境はまさにVUCAでしたし、今後もこの状態は続くものだと思われます。

この一番の要因は新型コロナウイルスの蔓延でしたが、コロナ禍をどうにか耐えていくという経験は良いレッスンになったとも思っています。モデル化が困難な複雑で変動していく環境では、ゴール指向で目的を共有しつつもプロセスには拘らず、場合によっては朝令暮改もお互い許容するスタンスが重要であることを知ることができたからです。

くまもと県北病院のレジリエンスの中心には総合診療科のスタッフがいます彼らは“有事”に派生する業務も“他人事”とせず取り組む姿勢を絶えず示してくれています。私はこれに甘えるばかりでなく、微力ながら彼らがVUCAの中でもやりがいや幸福を感じられる環境を整備していきたいと思っています。

■ 小山 耕太　非常勤講師（くまもと県北病院　総合診療科部長／総合診療科）

「次のステップ（続）」

熊本大学に帰還して10年目、教育拠点に赴任して9年目に突入しました。

コロナ禍で、ワクチンと治療薬の開発のお陰で死亡リスクが大幅に減少し、医療機関内を除く多くの社会がコロナ禍以前の生活を取り戻しつつあるこの頃です。くまもと県北病院も、院内のコロナ感染拡大リスクを低減すべく、試行錯誤の毎日ですが、社会のコロナ後にも順応し、診療体制も順次調整が求められています。その様な中、教育拠点としての総合診療科は、コロナ前と変わらぬ教育への情熱を持ち続け、当院も教育病院として多くの医学生・研修医からの支持を、フルマッチ形で目に見える形で発展を見せております。これも、田宮院長の新体制の賜物と、喜ばしく思います。

私個人としては、国内学会誌に2報の論文を投稿し、教育拠点の次のステップに向けて弾みをつけたいと考えております。更には、教育拠点で研鑽を積んだ人材が、大学院での研究分野にもコミットし、業績を上げるフェーズに入ったと実感するこの頃です。松井先生を中心に、新しく循環器内科から荒木先生をお迎えし、更に研究分野での発展が期待されます。また、現在の地域枠医師の1期生が、義務年限最終年度を迎え、このタイミングで私が熊本県庁医療政策課に兼任の形で着任することとなり、自治医大の学生や先生方にも診療指導・教育、キャリア支援を実践することとなりました。これまでの玉名、有

明地域での診療、教育経験を活かし、これからは熊本県全土に応用し我々の講座の更なる発展のための足掛かりになればと、身の引き締まる思いです。

今年度は、新しいステップを踏み、組織としての飛躍のため、常に前向きに活動を行っていきたいと思いますので、引き続き、皆様のご指導とご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

ゆっくりだけど、確実に前進

■ 古賀 義規　客員研究員（御所浦診療所　所長）

御所浦診療所は熊本県内で離島医療を経験できる数少ない診療所の１つで、総合診療科医師2名による常勤体制となっています。

COVID-19感染症流行のため、R4年度も多くのイベントが影響を受けました。クリクラ等の医学生実習は受け入れることができましたが、予定されていた天草圏域での医学生夏季実習は、R3年度に引き続きR4年度も結局中止となってしまいました。

新しく建て替えたられた診療所での診療は1年余りが経過しましたが、研修医や医学生のための宿泊施設も併設されており、利用者の感想によれば、快適に利用して頂いているようです。

R5年度はCOVID-19感染症流行を乗り越え、天草圏域での連携強化に加え、従来目指していた県内へき地公的診療所間の緩やかな連携構築にむけ、活動を活性化させたいと思っています。また教育面では多くの医学生や研修医に離島・へき地での地域医療に理解を深めてもらい、地域医療・家庭医療にやりがいをもって取り組める人材育成の一助となりたいと思います。

■ 片岡 恵一郎　客員研究員（小国公立病院　病院事業管理者）

2018年度より、松井教授のご厚意により客員研究員として、小国公立病院に勤務しながら、地域医療支援センターに出入りさせていただいており、2022年度が5年目となりました。

2021年度より、小国公立病院の事業管理者となり、病院の管理・運営業務が増え、地域の病院の未来を担うという事の責任の重さを実感しているところです。特に、2022年度は地域医療構想会議で、小国公立病院の再編・統合についての議論も最終局面を迎え、小国公立病院の阿蘇医療圏域内での役割をしっかりと再定義し、現在の病院の積極的存続に阿蘇圏域満場一致で合意していただくことができました。

2022年度も新型コロナウイルスの感染波が何度も押し寄せ、熊大の地域医療支援センターに足を運ぶ回数が少なくなってしまいましたが、昨年から準備していたオンライン診療車の導入が、国のデジタル田園都市国家構想の事業に採択され、2023年度小国公立病院で「小国郷医療MaaS/DX推進事業」として取り組む事になりました。少子高齢化の進んだ医療資源の少ない地方での課題解決の為の強力なツールとして大きな期待をもっております。こちらに関しては、熊本大学に力強いバックアップを頂きながら準備を進めているところです。導入後は、地域医療の実習・研修にも良い素材を提供できるものと考えております。

熊本大学からの地域医療支援は、地方にとって本当に貴重なもので、今年度も多大なるマンパワーを小国の医療現場に送っていただきました。

2023年度も、引き続いての厚いご支援に対してご恩返しができる様、客員研究員としてできる事を微力ながら務めさせていただきたいと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

■ 松本 朋樹　客員研究員（松本内科・眼科　理事長）

天草から、松本内科眼科の松本朋樹です。天草地域医療センターでの勤務の後、客員研究員の肩書を拝命し、両親のクリニックを継承しつつ、リクルートを中心に大学でのプロジェクトに関わらせていただいております。

天草は、熊本県の中でも医師確保が困難な地域であるため、医師修学資金制度の対象病院が数多くあります。学会のアンケートでも、へき地研修の不安点として、都市部へのアクセスの不便さや教育・指導体制への不安が大きいことが示されています。一方で、天草で働いてみて、これほど総合診療を実践できる環境は無いということを実感しています。医師の偏在は大きな課題の一つとなっていますが、総合診療はそれを解決する鍵となる診療科であると確信しており、卒前・卒後教育を通した総合診療の啓蒙は大きな意味を持っていると考えます。先生方のお力添えのお陰で、総合診療セミナーも第11回を迎え、

参加人数は毎回50人を超えるオンライン勉強会へと成長しました。情報の届け方や学び方は年々新しく進化しています。へき地でも新しい学び方、働き方が出来ると発信していくことが、へき地で働く医師が増えることに繋がると信じて、これからもコツコツと続けていければと思います。本年度も大変お世話になりました。

■ 武末 真希子　医師（総合診療科医局員）

本年度も引き続き診療所で勤務しながら、研究日を増やして大学院での研究も進めました。診療所では2年目になりできることも増え、都市型のプライマリケアをどう提供していくのか、今後に生かせるよう学んでいます。

大学院も2年目になり、研究は多くの壁に突き当たりながら、かなりゆっくりなペースですが少しずつ前進させている状況です。次年度は結果が出せるように、地道に努力を続けていきたいと考えています。困った時に相談や知恵を共有できるような人とのつながりも重要だと感じています。コロナもやや落ち着いてきており、学会参加など人とのつながり作りや新しい視野の獲得も積極的に行っていきたいと思います。プライベートでも色々なことがあり、前途多難ですが、4月からも前向きに励みます。

■ 松田 圭史　医師（総合診療科医局員）

今年度は熊本大学病院での勤務となりましたが、地域の病院とはまた違った視点で、地域医療や総合診療を学ぶことができました。地域を深く診るということも大切ですが、熊本県全体を広く診るということの重要性も改めて感じました。大学病院での診療はより難しい症例が多く、文献を調べたりカンファレンスで議論することで、新たな知見を得ることもできました。

また、総合診療科の先輩・後輩と関わる機会も多くありましたが、診療だけでなく研究や教育、学会発表、執筆など様々な分野で活躍されているのを目の当たりにし、とても刺激を受けました。

今後も熊本の地域医療、総合診療に関わっていくことになるかと思いますが、地域で学んだこと、大学で学んだことを活かしながら、広い視野を持って自分にできることをしっかりとやっていきたいと思います。今後とも宜しくお願いします。

■ 空田 健一　医師（総合診療科医局員）

今年度は湯島勤務となりました。湯島は有明海に浮かぶ離島で人口約220人、高齢化率は約60%です。もうすぐ高齢化率は下降に転じると思われます。大根や鯛などの特産品、美しい自然があり、多くのネコに癒されるなど魅力的な島です。島には濃い人間関係、独自の風習や価値観があります。時間がゆるやかに流れています。老衰の進行や認知機能の低下を認めても住み慣れた島で過ごしたいという住民は多いです。

ところで、コロナに罹患すれば高速の伝言ゲームで、島民みんなが、誰が罹患したのかを把握します。プライバシーのない環境を楽しめる住民だけではないので、少なからずストレスの原因になっています。娯楽が少ないこともあり、テレビをよく見ておられますが、いろいろと不安をあおられています。不安は、健診であおられることも多く、これはやめていただきたいです。

島では、ストレスからの生活習慣病、不眠、不安等の症状を認めており、診療所では、ストレスマネジメントに注力しました。人を動かすためには、相手の間違いを指摘してはいけないこと、自分の考えを相手におしつけてはいけないこと等を伝えました。セルフケアの方法についても、個別によさそうなものをお伝えしました。その他いろいろ取り組んだ結果、外来で訴えられる症状が、かなり減りました。

なお、ネコについては、最近増えてきて、地域おこし協力隊が避妊を行っているようです。ほとんどが野良猫で、アレルギー等の原因になっているように感じます。

引き続き湯島での勤務となります。今後もご指導いただきたく、よろしくお願い申し上げます。

■ 平賀　円　医師（総合診療科医局員）

令和2年～3年度は球磨郡公立多良木病院で2年間の勤務を行いました。地域の中小病院での総合診療医としての働きに慣れてきた頃でしたが、義務年限もあるため、R4年度からは阿蘇医療センターに移りました。新たな土地での挑戦でしたが、外来・病棟・救急・診療所・施設往診など総合診療科として幅広く

活躍できたと思います。COVID-19感染患者の入院診療や発熱外来のドライブスルー検査など、パンデミックでまったく医療の常識が変わってしまった昨今で、なんとか病気にならずくぐり抜けていた矢先、自分自身が年末の第8波時にコロナ罹患してしまい周りには迷惑をかけました(自室隔離されていたため、家族は誰も発症しませんでした)。

令和3年4月からは週に1回の研修日として熊本大学病院に行っています。当科の先生との意見交換やミーティング、外来患者のレビューなど地域勤務だけではできない経験もでき日々学びに繋がっています。

また、その他にもいくつかチャレンジできたこともありました。研修日を利用してcase report を書きました。松井教授や佐土原先生にサポートしてもらいながら、なんとか形にすることができました。これまでは地域で臨床にのみ時間を費やすことしかできませんでしたが、この経験を機にアカデミックな方面でも勉強して行ければと思います。

また、K-HANDS-FDFというFaculty development(FD)を学ぶ通年のワークショップにも参加し、教育に関する学びも得られました。今後は熊本大学総合診療科の後輩も生まれてくるので、教育活動・チーム作りなどにも積極的に参画して、診療以外の「プラスα」でも自分の能力を高めていければと思っています。

地域枠卒業生として8年目になり、そろそろ義務年限も修了が近づいてきました。改めて自分の周囲を俯瞰して見ると、地域枠学生も地域枠卒業生も増え、地域中核病院も若手医師が充実してきた印象です。さらには総合診療科専攻医も毎年あらたな仲間が増えてきているので、熊大総診もさらなるパワーアップしていけるのではないでしょうか。また新たな一年を楽しんでいきたいです。

■ 永田 洋介　医師（総合診療科医局員）

今年度は総合診療専門医を取得することが出来ました。

上級医による指導や、適切なフィードバックを受け、十分なサポートの元、仕事に従事することも出来ました。総合診療科外来に加え、救急外来での救急対応、一般病棟管理や集中治療管理、新型コロナウイルス感染症対策と様々な経験をしました。

様々な場面においても、健康を管理することはまさに総合診療そのもので、多面的に考えることの重要さを学びました。

その他、上部消化管内視鏡の手技を身につけ各科専門医による治療も同時に学ぶことが出来ました。

今後も引き続き成長出来るように研鑽を積みたいと思います。

■ 久保崎 順子　医師（総合診療科医局員／国立熊本医療センター）

令和4年度は医師として７年目となり、国立病院機構熊本医療センター総合診療科に異動しました。病院の立地を気に入っており、毎日、二の丸公園の中を気持ちよく通勤しております。国立病院の総合診療科は現在、医師は4名(男性3名、女性1名)で構成されており、業務量はちょうどいいと感じています。

【①外来・入院診療】

これまで勤務したくまもと県北での総合診療科では高齢者のコモンディジーズとしての肺炎、尿路感染の比重が多かった印象ですが、国立病院では、不明熱での紹介が多く、最終診断として膠原病(リウマチ性多発筋痛症、皮膚/多発性筋炎、成人スティル病)、またはウイルス感染症(HIVも含む)があり、機能性高体温症や自律神経失調症の診断となる症例も多いです。(肺炎や尿路感染症、敗血症は、内科全科および救急科に分散しています。)以上により、ステロイドや免疫抑制剤の使用、免疫グロブリン療法の施行などを学ぶ機会が多くありました。特に印象深い疾患は、感染症では日本紅斑熱、膠原病では好酸球性多発血管性肉芽腫症でした。

【②救急外来】

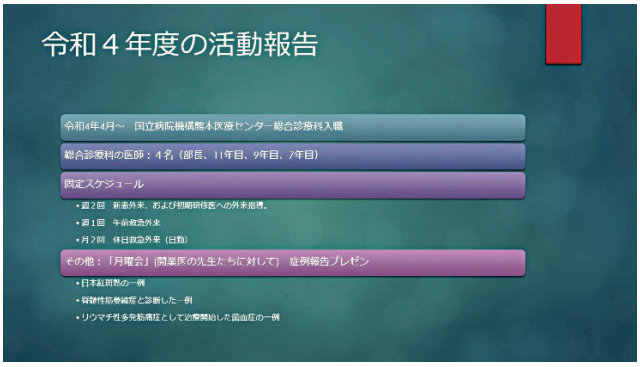
定期的に救急外来を担当し、初めて三次救急のファーストタッチを経験しました。日によって波があるため、てんやわんやになることもあります。救急科の先生に助けられることも多く、救急科の存在は非常に頼もしいと思いました。

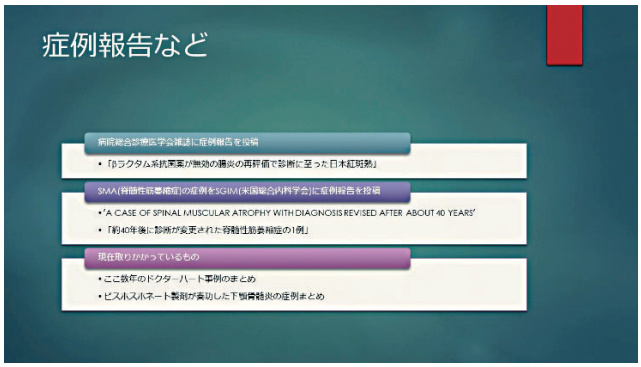
【③学術的活動】

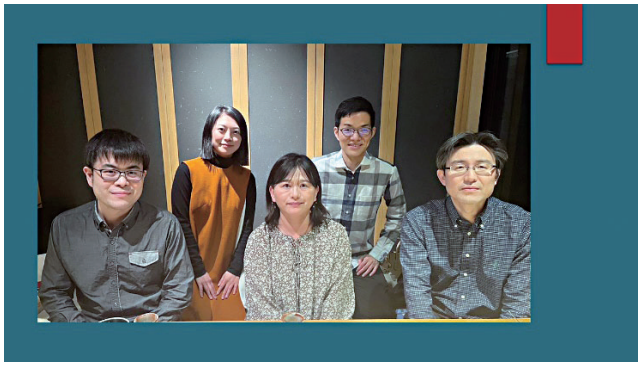
今年度、松井教授と佐土原先生のご提案で、SGIM(米国総合内科学会)への投稿を行いました。採択には至りませんでしたが、初めて英文での投稿を行い、いい経験になりました。

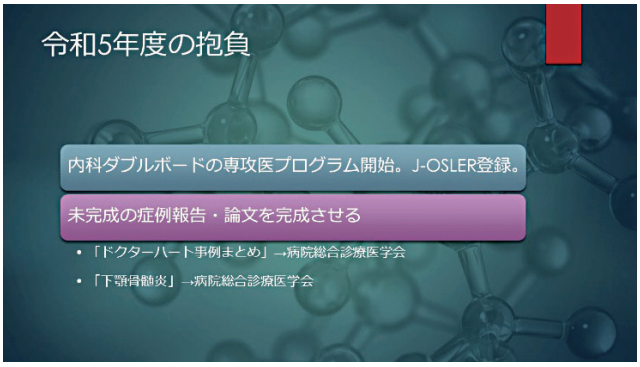
【④目標】

令和5年度からダブルボードとしての内科専門医を取得するため、改めて内科専攻医1年目となりました。論文、学会発表とともに、症例登録も頑張りたいと思います。









2. 事務から

松岡 大智
地域医療支援
コーディネーター

もう30年以上も前になりますが、私は県内の遠方の地域に2人の小さな子供を抱えて家族で暮らしていました。当時、生まれたばかりの下の子は病気がちで、しょっちゅう地域の総合病院の小児科にお世話になっていました。夜中に高熱を出し、あわてて病院に連れて行ったことが何度もありました。そして、いつも小児科の若い先生が「また来たね」と言いながら、笑顔で診察していただきました。若い私たち夫婦にとって、本当に心強い存在だったと思います。

今、大学病院で地域の医療を支えるお手伝いをしている私ですが、そのころのことを思い出し、かつての自分の身の幸運をかみしめています。子育て中の私たちにとって、子供が熱を出したとき、あの先生が診てくれる、その安心感と、治してもらったときの安堵感は、ささやかでも当時の私たちのとって最大の幸福だったように思います。

今もきっとどこかに当時の私たちのような若いお父さんお母さんがおられることでしょう。また、高齢者を抱えたご家族もいらっしゃると思います。どこの地域にいても、いつでも安心してお医者さんに診てもらえる、そんな社会であり続けられるために、自分に何ができるか考え、微力ながら地域医療を支えていきたい、そんな思いを巡らせています。

若杉 秀作
地域医療支援
コーディネーター

令和2年から令和4年と3年間の長期にわたり、社会がコロナ感性症の影響により、人、物の流れが大きく制限されることとなり、このことは、私どもが展開する事業においても少なからず影響を受けることとなりました。

さて、さて、令和5年はいかに。

コロナ感染症には意識しつつも、社会、経済を活性化させるべく国の対応も緩和される状況にある中、私どものやるべき事業も計画どおり実施していける5年度であってほしいと期待しています。やるべき事業計画の中でも、学生等を対象として夏季特別実習は是非とも実施していきたい事業の一つであります。

学生の皆さんが夏季特別実習を体験することで、地域医療という課題に対し認識を深め、医師として地域医療への貢献しようとする意識づけにもなりえると確信しているからです。

熊本県では、医師が不足する地域の病院等に医師として勤務しようとする医学部生に対し修学資金を貸与し、県内の地域医療を担う医師を養成するということで、「熊本県医師修学資金貸与制度」が平成21年度に創設され今日にいたっており、私ども熊本県地域医療支援機構は、本貸与制度による、医学部生、医師に対しきめ細かな支援を継続して取り組んでいかなければならないと考えております。

高塚 貴子
女性医師復職支援
コーディネーター

看護師の経験しかなく、女性医師の支援や事務業務については知識も経験もない状態でしたが、先生方や事務の方々、県庁の方々に色々教えていただきながらこれまでやってこられました。

「もう一度臨床へ支援事業」を始めるという事で、採用していただき、後藤先生と一緒に復職に関する様々な活動を行ってきました。学生講義でのキャリア形成や男女共同参画の取り組みのお話はとても勉強になりました。女性医師の相談業務や意見交換会で聞く悩みは私自身が抱えていた問題と同じで、後藤先生がアドバイスされているお話を聞きながら自分自身も救われていたように感じます。このような支援の場は、育児をしながら仕事を継続している人の心のよりどころであり必要な取り組みだと感じます。今後も悩める医師の相談の場として活躍を期待しています。

看護師として臨床の場で働き続けていれば出会う事のなかった人たちと沢山出会い、夏季実習等を通して医学部生の教育にも参加し、医療というものを多方面から見る事ができました。とても学びの多い6年間でした。

今後はまた臨床に戻り地域医療に貢献していきたいと思います。皆様本当にありがとうございました。

山口　香
事務補佐員

今年度の上半期は事務スタッフの入れ替わりの関係もあり、今まで以上に多忙な日々を過ごしました。こちらに来て５年目になりますが、初めて担当する業務等を多く抱え、新しい発見があったり、自己嫌悪に陥ったり、体調を崩したりと、心身ともにとても慌ただしかったように思います。そのような中で、先生方やコーディネーターの方をはじめ、多くの方に助けて頂きながら、何とか乗り切ることが出来ました。この場をお借りして、感謝申し上げます。

今年度の業務としては、引き続き新型コロナウィルスに振り回された1年となりました。ただ、3年目ともなると、この対面等で行事が出来ないという普通ではないはずの日常が、私自身、普通に思えてきていることに気付き、心配になった１年でした。

しかし、ようやく世の中が本格的に“脱コロナ”に向かいつつあります。やっとゼミや講演会も対面での開催が少しずつ可能になっているように思います。オンラインでの利点も数多くありますが、やはり相手の顔を見て会話を交わすことで、親しみや人と人との繋がりを感じることが出来る気がします。来年度は3年前の感覚を取り戻しながら、自分自身、気を引き締めて残りの任期を大切に過ごしたいと思います。

尾方 千穂
事務補佐員

日本で最初に新型コロナ患者が報告されてから、3年経過しました。

多くの「感染の波」を経験しながら、様々な制限の中で業務を行いました。

私が担当した『地域医療ゼミ』の一環、夏季実習は、2年ぶりに再開出来ると着々と準備を進めていました。

しかし、開催目前で感染が拡大し、中止を余儀なくされました。指導に熱心な先生方の肩を落とす姿が印象に残っています。

この様な中、少しでも、現場の声を届けたいと9月、10月に知事指定病院等説明会をオンラインにて行いました。説明会の動画をホームページに掲載し、多くの人に伝えればと願っております。

また、同じくゼミで医師・医学生と共にトリアージをテーマのドラマを見た事は、とても印象に残っています。災害時の医療トリアージの内容は、架空のストーリーとは認識しながらも忘れていた熊本地震の恐怖がよみがえりました。

そんな中、実際に医療の現場に立つ方々と意見を交えながらの視聴は、貴重な時間となりました。

機構の業務に携わり、多くの経験と機会を与えて下さった多くの方々に感謝申し上げます。

山並 美緒
事務補佐員

今年度10月から、またこちらでお世話になることになりました。半年間10～50代の方々と接しました。病院・大学・地域医療・総合診療から一旦離れてみて、見えたことを記したいと思います。

まず、新型コロナウイルスの捉え方。医療に関わらない社会、特に若者の間ではコロナは既に恐るるに足りないものとなっていました。いつかかかるもの、かかっても平気で問題ないという感覚にびっくりしたことを覚えています。

次に、働き方が多様化していたこと。民間企業ではリモートワークが当たり前でフレキシブルな勤務が可能なところが多く見受けられました。小さなお子さんの育児や親の介護など家庭の事情で働き方が制限されている方にも働けるチャンスが広がった社会に変わったなと実感しました。

そして、まだ世間には「総合診療」というものが浸透していないこと。地域医療はなんとなく分かるが、総合診療科って何を診るの？と何度か聞かれました。いまだに臓器別の診療科の認知が多く、何科を受診すべきか分からなくてもみんなあまり困っていないというのが私の印象です。

結論としては、社会的に働きやすくなったが、医療や福祉への問題意識は低いというところでしょうか。もっと一般の方へも地域医療・総合診療の必要性をPRして、世論を動かしていくことも必要かもしれないと感じました。

そういう心構えでこれからも努めてまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。

3. あとがき

令和4年度もCOVID-19感染症が猛威を振るい、熊本県でも一時は1日あたり6000名以上の感染者が報告されました。重症化率は低下したものの、地域の医療機関に与える影響は依然として大きいものでありました。幸い本報告書作成時には感染者数も減少しておりこのまま落ち着いてくれればと心より願っております。

さて、令和4年度の活動報告をさせていただきましたが、地域医療支援センターは設立9年目となりました。COVID-19感染症の状況を鑑み、残念ながら「夏季地域医療特別実習」は本年度も実施することができませんでした。本実習は自ら地域に赴くことで地域の問題点を知り、地域医療に取り組む意欲を醸成する貴重な機会でありますが、令和元年に実施した上球磨地域での実習を最後に3年連続で中止となってしまいました。一方、年度後半では熊本大学医学部医学科の授業も対面で実施できるようになり、地域枠学生に対して行っている「地域医療ゼミ」も対面開催が実現しました。顔を合わせてコミュニケーションをとることで学年間の縦のつながりがより強固になった印象です。また令和5年度の地域枠入学者は8名となっており、熊本県で活躍される方々が確実に増加している状況です。また修学資金貸与医師の中には来年度が義務年限の最終年度になる先生もおられます。今後も修学資金貸与生の皆様のキャリア形成をさらに充実させるべく方策を進めてまいります。

また本機構の広報誌である「COCODE ！」もvol.4およびvol.5を発行しました。来年度は私も編集委員に加わり、さらに熊本県内の地域医療の魅力をお伝えできる務めてまいります。

最後に本年度は馬場秀夫機構理事長を始め、熊本大学のスタッフの皆様、熊本県医療政策課の皆様には多くのご指導・ご支援を賜りましたこと深く御礼申し上げます。また来年度も変わらぬご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

熊本大学病院
地域医療・総合診療実践学寄附講座
地域医療支援センター
荒木　智

熊本県地域医療支援機構／熊本大学病院　地域医療支援センター
〒860-8556　熊本県熊本市中央区本荘1-1-1
Tel：096-373-5627　　Fax：096-373-5796
E-mail：chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp
HP：http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/

熊本大学病院　地域医療・総合診療実践学寄附講座
〒860-8556　熊本県熊本市中央区本荘1-1-1
Tel：096-373-5794　　Fax：096-373-5796
E-mail：chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp
HP：http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/dcfgm/

令和４年度　活動報告書

熊本県地域医療支援機構 / 熊本大学病院 地域医療支援センター

熊本大学病院 地域医療･総合診療実践学寄附講座
地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座
感染症対応実践学寄附講座